

当院の助産師外来の現状と今後の課題

北3階病棟 ○福島廣美 岩隈真由美 赤峰陽子 本理恵 田中えみ子
山本仁美 鈴木智子 熊谷三津子 太田純代

1. はじめに

当院は、平成6年に助産師外来を立ち上げた。施設分娩が99%と言われる時代に施設での正常妊産婦のケア向上と施設内助産師の自立をめざした。

近年の当院における妊産婦の背景は合併症妊婦の増加に伴い医療介入が増え、また社会的背景も複雑化し問題は多様化している。それらの対応に追われ、助産師外来の活動も低迷していた。また妊婦も主体性を持って分娩・育児に取り組むことも少なく、分娩数の低下に伴って、受診者は減少していた。

昨年度の診療報酬改定で特殊外来の報酬を検討し、助産師外来見直しの機会を得た。昨今の産科医減少問題で施設内助産師のあり方が注目されていることもあり、当院助産師の意識も向上し、活動が活発化している。助産師外来の更なる発展に向け、受診者の現状を検討し今後の課題を明らかにしたため報告する。

2. 活動内容

《助産師外来の目的》

- ① 母子保健管理の充実と継続性を図る
- ② 妊婦の主体性を支援し、健全な母性の育成を目指す
- ③ 助産師としての専門性を発揮し、自立的活動を実践する
- ④ 後輩育成、学生教育の場とする

《助産師外来の目標》

- ① 妊娠各期に応じた指導や情報の提供ができ、正常な妊娠経過をたどることができる。
- ② 妊娠期から分娩・産褥期を通じて継続看護を実施する。
- ③ 妊婦とその家族の分娩・育児の希望を取り入れ、妊婦・家族の意思決定を支援できる。
- ④ 事例や経験、研修・勉強会を通して、助産診断能力や指導の技術を向上できる。
- ⑤ 自立的活動を実践することで助産師としての役割モデルを果たせる。

《助産師外来の位置づけ》

- ① 正常妊産婦のサポート
- ② 医師との協働
- ③ 母乳育児支援

《助産師外来実施要綱》

- ① 担当者：4年目以上の助産師で外来指導・退院指導・マザークラスの出来る希望者
- ② 対象者：20週以上の正常な妊婦
(40週以上は一般外来とする)
- ③ 実施方法
日時：毎週水曜日 1人30分 14～16時
完全予約制
場所：産婦人科外来
内容：一般妊婦健康診査（検尿・体重測定・血圧測定・問診・視診・触診・計測診・内診・血液検査（28週,36週）・胎児心拍モニタリング
保健指導
* 28週,36週は医師の診察
* 超音波検査は診断には使用せず、コミュニケーションの一部として活用する
* コスト：一般妊婦健診と同額

《助産師外来受診者数》

平成11年	2名	平成15年	4名
平成12年	2名	平成16年	2名
平成13年	2名	平成17年	4名
平成14年	2名	平成18年	2名
平成19年	11名	(12月1日現在)	

《平成19年受診者の分娩状況》

11名（9名分娩終了、2名他施設分娩）
初産婦8名、経産婦3名
平均分娩時間：初産婦12時間27分
経産婦2時間54分
平均出血量：191ml
分娩様式：6名正常分娩（86%）
1名帝王切開（骨盤位）
（2名他施設分娩のため不明）
母乳率（産後1週間）：
6名完全母乳（86%）
（2名他施設分娩のため不明）

《受診者の終了アンケート結果》（回答者 9名）

- ① 受診の動機
・細かいことを気軽に相談できる。（3名）
・ゆっくり時間をとって話したい。
・出産に対して不安を取り安心して過ごしたい

- ・出産に向けて助産師とコミュニケーションが取りたい
- ・安心して相談できる。前回は助産師の指導が良かった。
- ・友人の勧め（助産師とゆっくり話せる）
- ・助産院の雰囲気がある。

② 良かった点

- ・不安、心配事が気軽に相談できた。(2名)
- ・不安が解消し、いつでも出産できる精神状態がくれた。
- ・ゆっくりと健診してくれた。
- ・顔と名前を覚えてくれ、親身になってくれた。
- ・質問以外にもアドバイスをくれた。
- ・母乳育児について希望がなかった。
- ・すぐに医師と連携してくれた。
- ・待ち時間が短い。

③ 期待はずれだった点

- ・助産師によってアドバイスが少し違い迷うことがあった。
- ・いろいろな助産師と関わってよかったが、メインの担当者が分かりにくかった。
- ・引継ぎが上手くないときがあった。
- ・エコーに時間がかかった。
- ・推定体重を教えてもらえなかった。
- ・判断が適切か不安なときがあった。
- ・指導室が狭い。

④ 次回妊娠時の受診希望について

全員受診希望あり

理由：

- ・不安なくお産に臨めたので。
- ・助産師とコミュニケーションがとれ楽しかった。
- ・頼りになった。
- ・親切、丁寧に接してもらった。(2名)
- ・ゆっくり相談しやすく、よかった。(3名)

⑤ 助産師外来への希望

- ・更に発展し院内助産院を設立して欲しい。
- ・他の曜日でもして欲しい。

3. 現状の検討と今後の課題

近隣施設の分娩閉鎖に伴い、平成16年より、当院の分娩件数は増加傾向にある。減少していた助産師外来も院内ポスター、外来・マザークラスでの紹介、ホームページなどのアピールにより、平成19年11名の受診者を受け入れた。また外部への情報提供により他施設からの見学も受けている。アピール方法の工夫で内容がより伝わり、関心も高まると思われるため、今後もアピールの方法や内容の検討が必要である。

分娩終了者に対しアンケートを行い、これを元に目標①～③について検討、考察した。(別紙表参照)

目標④について、医師に超音波の講義を依頼した。また乳房ケア、超音波診断、妊婦指導方法、母子整

体など妊産褥婦のケアに必要な知識・技術取得のため各自が研修に参加し伝達講習で共有した。医師に内容を伝え、実施して効果が得られたものは外来の中で取り入れた。担当者の知識・技術の向上のために今後も勉強会や検討会で共有し、実践に結びつくよう指導基準を見直していく必要がある。

目標⑤については今回スタッフ側の調査を行っておらず、今後スタッフの意見を吸い上げての検討が必要である。まずは定期検討会への参加を促し、意見を引き出して今後自分たちの外来として考え取り組んでいけるように働きかける。また担当者がやりがいを持って実施し結果を出していくことで役割モデルが果たせると思う。

4. 課題のまとめ

1) 提供するケアの質の向上

- ・ 専門家として助産診断の向上
- ・ 指導・助産技術の向上
- ・ 助産師外来基準・助産基準の見直し

2) 継続的ケアの向上

- ・ プライマリー制の見直し
- ・ 個別的な関わりを継続的に提供する(スタッフ・医師との連携)
- ・ 外来の体制見直し(担当者、外来枠)
- ・ 産褥期ケアの充実

3) 妊産褥婦の主体性を高める支援

- ・ ケースに応じた対応
- ・ 家族を含めたケア

4) 助産師の自立と育成

- ・ 助産師としての意識の向上
- ・ 役割モデル

5. おわりに

母子と家族に優しい、安全で安心なケアを提供し支援していくために、助産師としての役割を見つめなおし、医師と協働しながら向上していけるよう努力を続けていきたいと思う。

<参考文献>

- 1)江角二三子：実践から学ぶ助産師外来 設営・運営ガイド,メディカ出版,2005
- 2)遠藤俊子他：満足で安全なお産「院内助産院」をめざそう,助産雑誌,2006,vol60,4,医学書院
- 3)福井トシ子他：チームで育つ助産の力,助産雑誌,2006,vol60,2,医学書院

3. 現状の分析と考察

目標	現状	アンケート結果	考察
<p>①妊娠各期に応じた指導や情報の提供ができ、正常な妊娠経過をたどることができると期待する</p>	<p>月2回の検討会で指導内容や健診時に行うことを確認し共有した。助産師外来の対象者は1名以外すべて正常な妊娠経過をたどり、正常分娩であった。1名は骨盤位であり選択的帝王切開となった。通常妊娠経過に異常をきたした妊婦は医師の健診により医師と連携し分娩まで助産師外来で経過をみた。</p>	<p>○良かった点 「ゆっくりと、気軽に相談することができた」 「不安が解消した」 「質問以外にもアドバイスがくれた」 「すぐに医師と連携をしてくれた」 ○期待はずれだった点 「助産師によりアドバイスが少し違い迷ったことがあった」 「エコーに時間がかかった」 「推定体重を教えてもらえなかった」 「判断が適切か不安なときがあった」</p>	<p>妊娠期の指導は対象者の「不安が解消できた」の声よりほぼ達成できている。「アドバイスの違いで迷った」については週毎に変化する妊婦の状況に応じて指導をしているが、担当する助産師が変わることや戸惑いがあったと思う。妊婦の受け止め方を確認し安心・納得できるよう、また妊婦自身が健康意識を持って自ら自己管理できるような指導技術の向上が必要である。 エコー技術は学習中であるが、助産師外来ではエコーによる診断は行わず、児の顔を見るなどコミュニケーションの一部としている。健診内容について十分な事前の説明と同意が必要である。しかし昨今の医療状況や妊婦のニーズを考えると、今後エコーを用いた診察技術の向上も必要である。 帝王切開の事例は助産師と良好な関係が取れており継続したが、医師と細やかなやり取りが必要であった。妊婦の反応からも医師への診察の依頼や医師の健診に戻す基準を決める必要がある。リピーターの声や次回の受診希望の内容から対象者は助産師との関わりに満足感を持っている。今後も施設側の体制を考慮しながらケースに応じた対応ができるよう連携が必要である。</p>
<p>②妊娠期から分娩後期を通じて継続看護を実践する</p>	<p>2~3人のプライマリ制だが勤務体制で担当以外のスタッフの関わりも多かった。情報は共有したため、各々が全ての対象者に関わった。病棟でも週1回カンファレンスで情報提供した。分娩や育児への思いを伝え、可能な限り分娩時は担当者が付き添い、産褥期から1週間の電話訪問を担当した。一ヶ月健診は医師の健診で経過をみた。</p>	<p>○良かった点 「顔と名前を覚え親身になってくれた」 ○期待はずれだった点 「いろいろな助産師と関わってよかったがメインの担当者が分かったら良かった。」 「引継ぎが上手くいっていいときがあった」</p>	<p>後期に入ると健診回数も増え、同日に数名重なることもあり、夜勤等の勤務体制から担当者が毎回見ることが難しかった。多くの助産師に関わることへの良い評価もあり、チーム制とプライマリ制をうまく取り入れたい良い体制を検討する必要がある。 分娩時プライマリが担当しないこともあるため病棟スタッフにより情報が分かちやすいように定期的な検討会への参加を促し、専用情報ファイルの整理が必要である。 一ヶ月健診を現在は主治医の健診に戻しているが、多忙な外来業務ではゆっくりに関わることが難しい。継続して関わっていくために産褥健診の診察技術を向上し、医師と連携しながら助産師外来で健診が行えるようにしていきたい。</p>
<p>③妊婦とその家族の分娩・育児の希望を取り入れ、妊婦・家族の意思決定を支援する</p>	<p>妊娠・分娩・育児の希望を確認し、各期の健診で目標が達成できるような心身の準備を整えるため支援していった。家族と相談の末里帰り分娩を選んだ妊婦、分娩への思いを確認しながら当院で対応可能なかを検討し最終的に助産所で分娩を決めた妊婦、それぞれ十分に関わり意思決定を支援した。 母乳支援は希望に応じ細やかに行った。入院後は毎日のショートカンファレンスで状況を伝え、ケア方針を周知していった。完全母乳率は全体(65%)と比較し、85%と高くなった。</p>	<p>○動機 「出産に向け助産師とコミュニケーションが取りたい」 ○良かった点 「いつでも出産できる精神状態が作れた」 「母乳育児についての希望があった」 ○今後の要望 「他の曜日でも健診して欲しい」 「院内助産院を設立してほしい。」</p>	<p>施設分娩が多い中で、医療者側にお任せという妊婦は多い。妊娠・出産・育児を自分らしく大切に、自ら健康管理していくためには主体性が必要であり、関わりの中でそれを育んでいく必要がある。当院で分娩しなかった事例も方針を決定していく過程に十分関わり、妊婦自身が自己決定することへの支援ができた。 一般外来でも母乳指導は行っているが助産師外来では妊娠からの継続した指導により妊婦の母乳育児への意識が高まったといえる。またスタッフ間のケアを統一し、母子を主体として支援できたことで母乳率が向上したと考える。 主体性を持ち、助産所で分娩を希望する女性も少しずつ増えている。その中で妊婦や家族から、安全性に不安を持つ声も聞かれる。病院という体制(安全)の中で助産院のように個人の主体性を尊重した温かみのあるケアが求められ「院内助産院」を開設した施設も少しずつ増えている。これらの妊産婦の要望を満たすために受ける側の施設助産師は専門的な知識・技術をより一層向上し、妊産婦の主体性を支え助産師として自立していく必要がある。</p>